



連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」第十一回は、こちらから見るができます。

発達の中の

煌めき

第II部

発達の共感が創り出す実践
—歴史に学び、今をみつめ、
未来を創る—



白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第1回 「発達の共感」とはなにか —糸賀一雄に学ぶ—

「第I部」では、発達の道すじにそって障害のある子ども・人びとの生きる姿をたどってきました。「第II部 発達の共感が創り出す実践」では、発達保障にかかわる現下の課題をみつめつつ、子ども、家族、働く人びとのねがいが響きあい、発達保障の実践が創られてきた歴史を学びます。そして、保育、療育、教育、放課後や成人期の支援などのこれからを、みなさんとともに展望していきます。その一回目として、「発達の共感」とはなにかを、糸賀一雄に学びながら考えてみましょう。

糸賀一雄のこと

糸賀は、鳥取市に生まれ大学卒業後、代用教員の職に就きますが、間もなく赤紙の招集をうけます。しかし訓練中に病に倒れ招集は解除。二年後の再びの招集でも、「役に立たない」とすぐに帰郷を命ぜられます。同時期に応召した戦友のほとんどが帰らぬ人となるなかで生き残った彼は、滋賀県庁に奉職することになります。そこで社会教育等にかかわっていきますが、戦争が激化するさなか、厳しい食糧事情のもとで食糧課長の激務につき、終戦を迎えます。激務はつづき、

からだをこわした糸賀は職を離れることを余儀なくされます。療養している彼のもとに池田太郎、田村一二が訪れ、のちの近江学園の構想が語られました。

当時、混沌と虚脱が支配する社会に焼け出され、親を失った子どもたちは、「浮浪児」として町中に溢れていました。その子どもたちが社会問題となるなか、急ごしらえのバラックが建てられ、そこに子どもたちが続々と送り込まれていきます。いわゆる「浮浪児狩り」がおこなわれたのです。しかし、そこに安住の地を見いだせなかった子どもたちは、脱走し、また収容し…の繰り返しでした。知的障害（当時の「精神薄弱」）があるゆえに、家庭から捨てられた子どもたちも、「浮浪児」の群れのなかにいました。

近江学園は、戦災孤児と知的障害児のための施設として一九四六年に創設されるのですが、「現に浮浪している子どもたちを救おう。生活困窮の泥沼の中に沈没している子どもたちを救おう。そして彼等の中に、今はかくされている個性の輝きを、何とかして引き出すことはできないものだろうか。…精神薄弱のゆえに捨てられている子どもたちをこそわれわれは、さがし出してでも引き受けよう」

というのが学園創設の「いとも単純な構想であった」と述懐します。

そして、近江学園設立から二十二年後。多くの子どもたち、職員たち、地域の人々と、艱難辛苦のなかにも幾多の喜びを創り出していった糸賀は、一九六八年九月一七日、滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会で二時間の講演をおこない、最後のまとめをするなかで倒れ、翌日、五十四年の生涯を閉じました。講演の演題は「施設における人間関係」でした。

「共感の世界」について

最後の講演で糸賀は、「およそ教育というものは、人間と人間との関係のなかで行われてゆくもの」であり、保育者や教師との間に、よい人間関係がえられることによって、子どもたちは人間的な成長をとげていく、その関係は「共感の世界」でなければならぬと語ります。

「共感の世界」が教育の根底に据えられなければならない根拠として、誰もが「障害の足踏みをしななければならないよ」うな壁の前に何べんも突っ立たされたんだけれど、その溝をこえ、壁を乗り越え、今日こうして生きている」のであり、「重症心身障害とか、精神薄弱とか

言われる人々と、そして私たちが実は根が一つだという、本当に発達観から見ても根っこが一つなんだという共感の世界」があるのだと力説します。すなわち、共通の道すじがあるという発達観と、その発達の道すじに障害を位置づけてとらえる障害観が、「共感の世界」の根底に位置づくようになっていたのです。

だからこそ糸賀は、障害名だけで子どもをとらえる見方に対し、「この子は愛情欠乏症」なんてベタンと額に貼ってですね、愛情欠乏型というような子どもがそこにできちゃうわけですね。そういうような何か非常にこの単純なね、その奥底を理解しようとしないうころの表面的な、形式的な「見方を、「分類処遇」「レッテル貼り」として厳しく戒めました。

「福祉の思想」では、共通の発達の道すじについて、次のように語っています。「重症児が普通児と同じ発達のみちを通るということ、どんなにわずかでもその質的転換期の間でゆたかさをつくるのだということ、治療や指導はそれへの働きかけであり、その評価が指導者の間に発達の共感をよびおこすのであり、それが源泉となって次の指導技術が生み出されてくるのだ。そしてそういう関係